

### 4 倍体秋ソバ「みやざきおおつぶ」の播種時期、播種密度について

森藤信治・大賀康之・三善重信 (福岡県農業総合試験場)

MORIFUJI, N., Y. OHGA and S. MIYOSHI: Effect of Seeding Time and Seeding Rate on the Yield of Tetraploid-Buckwheat "MIYAZAKIOOTSUBU"

新しく育成された四倍体秋ソバ「みやざきおおつぶ」の福岡県における栽培特性を明らかにするため、1982年に播種時期および栽植密度について福岡在来種との栽培比較を行ったので、その概要を報告する。

#### 1. 試験方法

四倍体秋ソバのみやざきおおつぶと二倍体秋ソバの福岡在来を供試し、水田土壌(砂壤土)を25cm客土した造成期に8月16日(早播き)および8月31日(適期播き)の2回に播種した。栽植様式は畦幅120cm, 1畦2条の畦立栽培で、条間50cm, 幅播は10cmとした。苗立本数は100(粗播), 200(標準播)および300(密播)本/m<sup>2</sup>の3水準とした。

なお、施肥量は標準栽培に準じて全量基肥とし、窒素、燐酸および加里を0.25, 珪カル10, 牛糞堆肥400kg/aを施用した。

#### 2. 結果および考察

早播きおよび適期播きとも、みやざきおおつぶと福岡在来との間には開花期、成熟期の差がほとんど認められず、同熟期と考えられた。播種時期の早晚と生育日数との関係は早播きでは84日、適期播きでは75日で、播種期が早くなると生育日数は長くなった。これは開花まで日数については、早播きで30日、適期播きで28日と播種時期間に余り差がなかったけれども、早播きでは開花期が長くなることによつて結実期間が長くなり、生育日数も長くなったものと推察された(データ省略)。

播種時期および苗立本数と生育、収量ならびに収量構成要素の関係を第1図に示した。

茎葉重は倒伏程度および倒伏時期によつて影響され、適期播きでは開花期直前に風雨により倒伏したため、みやざきおおつぶは倒伏程度の大きかった密播区ほど茎葉重が低下した。しかし、早播きでは両品種とも倒伏時には生育量は充分確保されており、密播区ほど茎葉重が増加した。なお、みやざきおおつぶの1本当たりの生育量は100本/m<sup>2</sup>では福岡在来より大きかったが、200本/m<sup>2</sup>では生育量に差は認められず、みやざきおおつぶの密播適応性は低いものと推察された。

みやざきおおつぶの稔実粒数は福岡在来より少なく、早播きでは密播によつて増加したが、適期播きでは反対に密播によつて減少した。稔実粒数が最高となった播種時期は両品種とも適期播きで苗立本数はみやざきおおつぶでは100本/m<sup>2</sup>、福岡在来では200本/m<sup>2</sup>であった。

四倍体のみやざきおおつぶの子実千粒重は40g前後であり、福岡在来の25g前後に比べて、1.6倍程度重かった。播種時期および栽植密度による千粒重の変動はわずかであったが、早播きおよび密播により倒伏程度が大きくなり、

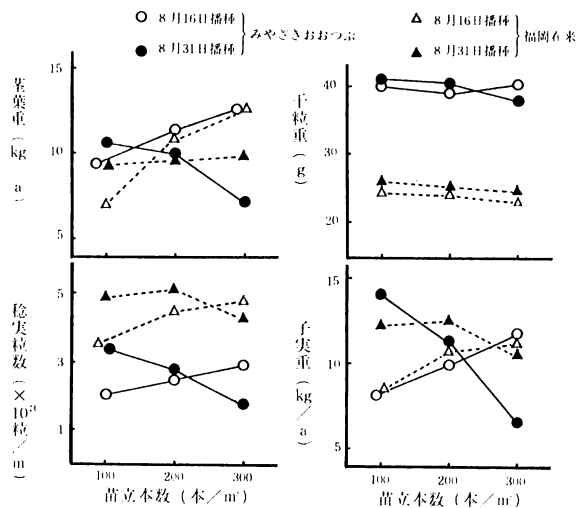
千粒重は軽くなった。

子実収量は早播きでは密播により増収したが、適期播きでは倒伏程度が大きかったみやざきおおつぶの密播区は減収した。子実収量も稔実粒数と同様にみやざきおおつぶでは適期播きで苗立本数100本/m<sup>2</sup>、福岡在来では適期播きで苗立本数200本/m<sup>2</sup>で最高となった。

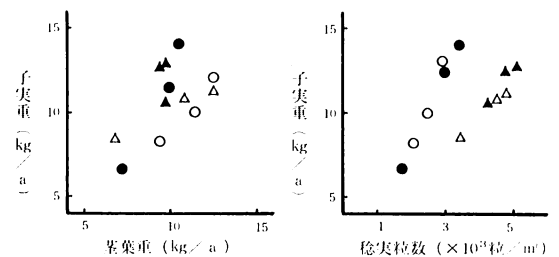
茎葉重および稔実粒数と子実重の間には密接な関係が認められ(第2図)、茎葉重が重いものほど、また稔実粒数の多いものほど増収した。これら茎葉重、稔実粒数は倒伏等の障害により変動しやすいものと考えられる。

#### 3. まとめ

四倍体秋ソバみやざきおおつぶの播種時期および播種量について検討した結果、播種時期は従来の秋ソバの播種適期である8月下旬であり、この場合の目標苗立本数はm<sup>2</sup>当たり100本で、10a当たりの播種量は、子実の千粒重40g、苗立歩合を70%として、7kgが適当と考えられる。



第1図 苗立本数と茎葉重、収量及び収量構成要素



第2図 茎葉重および稔実粒数と子実収量